

明石市立市民病院

70年の あゆみ



名誉院長 山本 稔

明石市立市民病院が設立されたのは昭和25年10月で、今年で70年を迎えました。私は昭和28年秋から1年余勤務していたことがあり、昭和34年から再び赴任してきて、新しい病院に勤務して以来、平成3年に現在の病院が完成する迄在職しましたので、70年間の事を振り返ってみたいと思います。

1 市民病院設立の前後

市民病院の敷地は明石城の一部で、明治以降宮内省の所管でしたが、大正になり一部売却され、摂津紡績、大日本紡績として立派な煉瓦作りの工場でした。戦時中、川崎航空機のガスマスク工場でしたが、戦後は農協のゴム靴工場で、現在工場はホームセンターやスーパーになっています。病院はその工場の工員さんの宿舎で、十棟以上の大きな建物でした。戦後、川崎航空機の診療所の医師が主となって、川崎産業明石病院として診療をはじめていました。その頃、全国的に県立病院や日赤等がない市は市立病院を持つ傾向がありました。明石市も川崎産業の病院が市に移管されることになり、昭和25年10月10日に124床の総合病院として発足しました。

2 名称

明石市立市民病院と長い名称は当時まだ明石川の川尻西側（現在下水処理場）に明石市立伝染病院があり、また併合地に明石市立魚住診療所や明石市立二見病院等市立の医療機関が複数あったためです。



3 初期の病院

開院当時の病院は、管理棟と手術室等は木造で建てられましたが、それ以外は広い大きな部屋が並ぶ旧

寄宿舍でした。そのうち2棟は、1階は外来診察室、2階は医師や技師の居室でした。3棟目から奥は病室になっていました。医師は内科が3名、外科、小児科、産婦人科が各2名、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚泌尿器科、放射線科、歯科が各1名の計14名でした。その内5名が陸海軍の軍医さんでした。



昭和25年当時の病院



開院当初の病院正門



開院当初の病院前の道

4 第1次改築

病院の運営は順調で各診療科も充実してきましたが、大正年間に建てられた寄宿舍のため、病院としての運用には無理があり、昭和30年頃から全面改築の

機運が出てきました。最初に建てられたのは当時まだニーズの高かった結核病棟で、昭和32年8月、100床が2階建鉄筋コンクリートで建てられました。続いて10月には病院の一番離れた奥に45床の平屋の伝染病棟が新設されました。続いて昭和33年1月に外来診療棟を、8月には一般病棟102床、34年3月に手術室が、更に9月には一般病棟100床が建てられ、最後に昭和35年3月に売店等サービス部門等も完成し、347床（一般202床、結核100床、伝染病45床）の病院になりました。病院の建築様式としては現地建替の多翼式、或はパビリオン型と云われ、国内では海軍跡の国立病院や広いヨーロッパの病院によく見られるタイプです。すぐ庭に出られる等環境には優れていますが、病棟と放射線室や手術室等を利用するときの導線が長く、不便な面もありました。

■ 当時の案内図



5 整形外科病棟の増築、未熟室の増室

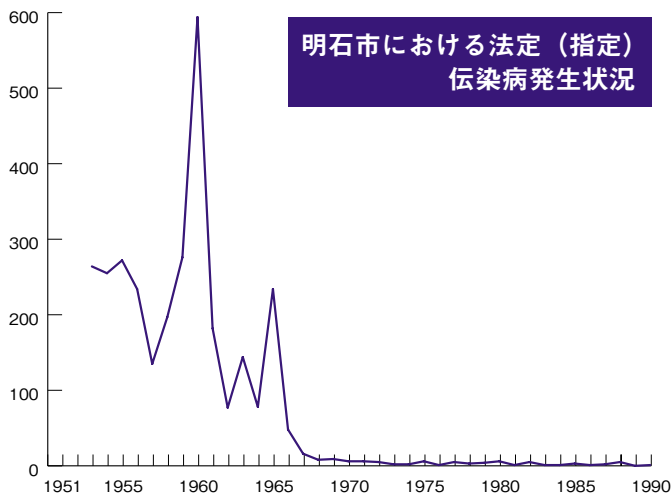
昭和35年に改築が終わって間もなくの時代の流れで整形外科を新設することになり、結核病棟と一番奥の伝染病棟との間にリハビリ棟を持つ110床の整形外科病棟が建てられ、457床と大きくなりました。

一方、団塊の世代が結婚して、昭和40年頃から出生数が増加の一途をたどり、明石市では年間5,000を超えるまでになりました。そのため未熟児やハイリスクの新生児が増加してきたことから、昭和44年には22床の未熟児室を増築しました。



6 伝染病の減少と疾病構造の変化

戦後の明石市では、法定伝染病の患者が年間3桁の発生が続いていました。昭和35年3月には花園小学校の給食による502人の赤痢があり、その翌年にも工場で150人ほどの赤痢があったりして大変でした。しかし抗生物質の進歩や電気冷蔵庫の普及等で急性伝染病は極端に少なくなってきました。また、結核も重篤患者が漸減し、結核病棟の利用率も下がってきたため、昭和45年50床を一般病棟に変更しました。



7 消化器内科の新設と泌尿器科の分離

昭和46年4月から胃腸科が新設され、昭和47年7月から泌尿器科が皮膚科から分離しました。その頃からX線TV、超音波診断装置等診断用医療機器も長足の進歩をしました。

8 医師会立の准看護婦学校の設立と病弱児学校の設置

昭和45年2月病院の南東隅に明石市医師会の准看護婦学校が設立されました。建物には王子小学校の校舎が一部移設されました。

小児の慢性疾患も結核や腎炎等が減った代わりに、白血病やネフローゼ等長期療養の病児の教育が必要となり、昭和54年から小児科病棟の一室に明石小学校の病弱児学級が発足しました。



9 新医療機器の導入

昭和50年代になりますと画像診断機器の発達が目覚ましく、CTの導入、内視鏡室の充実、超音波診断装置の整備が加速しました。検査室では多項目血清自動分析装置や自動血球計算機などを新しくすることになりました。一部増築しましたが、手術室の不足は深刻で、全面改築の要望が大きくなってきました。

10 全面改築事業

昭和 58 年に院内に改築研究委員会が発足し、厚生省病院管理研究所の指導により基本構想を作る準備を始めました。新しい武蔵野赤十字病院や倉敷中央病院等の先進病院や伊丹市民病院や宝塚市民病院等県内で改築された病院等を見学しました。また、市会でも市民病院改築委員会が設置され、仙台等の新しい病院の視察も行われました。そして最終的には 11 社から企画提案がありましたが、病院設計専門家を含む委員会で新病院の設計が決定されました。

11 新病院の建築

改築が決まり準備基金が設けられ、国から起債も許可され、工事業者は指名委員会により決定され、昭和 62 年秋から工事が開始されました。改築は現地建替えのため、診療を続けながら工事を進めるため、一番北側の空地に仮設の病棟を建て、結核病棟、整形外科や胃腸科病棟を取り除き、病棟部分から建築にかかり、地上 6 階地下 1 階が平成元年 10 月に竣工しました。続いて移転の終わった旧病棟を取り壊し、外来部門や放射線部門及び管理部門が新しい診察室へ移転し、従来の外来部門は取り壊して外構工事を行い、平成 3 年 3 月に念願であった病院の全面改築工事が終了しました。

病院北側に建てられた仮設病棟は病院南隅の木造の准看護学校が移転し、現在も利用しています。



12 新病院の完成

平成 3 年 3 月、新病院が竣工して現在の姿になり、玄関から入った天井の高いホール、廊下などの床材、外来のブロック別の構成、全体の温色を基本としたパステルカラー等、同年新築された全国の病院の中から日本病院建築学会賞に選ばれました。



13 21世紀の高齢化と医師不足

病院が新しくなったことで、外来も入院も患者数は増加してきましたが、混雑を極めていた小児科や産婦人科も少子化の為か、徐々に患者が減ってきました。一方内視鏡や CT、MRI 等の検査は急増し、平成 8 年消化器科の東側に増築し、内視鏡室を拡張しました。また法定伝染病が新しい伝染性疾患の分類に変わったため、10床を残した伝染病室も殆ど使われなくなり、高性能の MRI や CT の部屋に変更されました。

14 地方独立行政法人

平成 16 年から始まった新医師臨床研修制度により、全国的な医師の偏在や不足が起こり、当院でも、常勤医師が減り運営が困難になってきました。そのため明石市では明石市安心の医療確保政策協議会が開かれ、市民病院再生の協議が行われました。その結果、病院の経営を明石市の病院事業から地方独立行政法人にすることが決まりました。そして医療制度変更への対応、医師確保や患者サービスの向上などの改革に取り組みました。更に地域医療支援病院を目指して地域医療連携室を設置し、病診連携が円滑に行えるようにしました。また地域の患者、医師から信頼される医師の確保も進み、専門診療科が増えるとともに、救急医療も充実して市民の安心、信頼に応えつつあり、令和の時代の新しい地域医療に果たす役割に期待される所です。